

# 「播磨びと とは何者か」

時間 各回 13時30分～15時30分  
受付時間13時～

場所 加西市健康福祉会館 大会議室  
(加西市北条町古坂107-14)  
※11月14日のみ 加西市市民会館文化ホール

受講料 各回 500円

定員 上限無し 申込不要

第1回 10月10日(木)

「播磨国風土記」と「伊勢津彦」

第2回 11月14日(木)

※会場注意

「石部神社」という不思議な御社

第3回 12月12日(木)

「ヤマトタケル」と徐福と東国

第4回 1月9日(木)

「阿菩大神」をまつた人々は誰か?

第5回 2月13日(木)

「久米歌」と「久米」

第6回 3月12日(木)

徐福集団の「その前」と「その後」



講師プロフィール

講師 光田 和伸 氏

国文学者  
愛媛県松山市生まれ。元国際日本文化研究セン  
ター准教授。専門は比較文化、比較文学。主  
に和歌、連歌、俳諧を研究。著書に「恋の隠  
し方」兼好と「徒然草」―「芭蕉めざめる」  
(ともに葎草書房)。

紀元前1世紀、スサノヲの子・大歳神は播磨「加茂国」を拠点に国主の開拓に務め、やがて拠点を大和国に移して東国の開拓に乗り出した。それは、のちの大和政権のゆるぎない礎となった。これまで、その視点からお話ししてきました。しかし、それに先立つ播磨国の物語を考えざるを得なくなりました。

令和元年度

## 播磨国風土記講座

# 播磨びと とは何者か

大規模な水田稲作の開始は、弥生時代の到来を告げるもので、箱根山の東に限れば最古のそれは、小田原市の西北の「中屋敷遺跡」と「中里遺跡」で、紀元前3世紀と推定されます。そこから出土する土器は「播磨式土器」であると、弥生遺跡研究の東の泰斗・大塚初重博士が指摘しています。集団で東国に移住していたのです。どのようにそれを解釈すればいいのか。御代替わりの大嘗祭に合わせて「播磨のさらなる昔」を考えます。

光田和伸

第1回 10月10日(木)

### 『播磨国風土記』と『伊勢津彦』

『播磨国風土記』には地名・伊勢と伊勢津彦神の名が明記されている。伊勢は東国への橋頭堡だが、その勇者である「伊勢津彦」を祀る人々が播磨に帰住し、長く「伊勢」の地名を播磨に残したと考えられる。それは、どのような人々であったのか。

第2回 11月14日(木)

※会場注意

### 『石部神社』という不思議な御社

「いそべ」の名はサルタヒコ族の子孫のうち、伊勢から東国にかけて力を持った支流が名乗った名である。旧「加茂国」で最も風水のよい丘にある神社が「いそべ神社」で、南方へ広がる緩やかな傾斜地に加西市最古の水田稲作遺跡があるのは何を意味する？

第3回 12月12日(木)

### 「ヤマトタケル」と徐福と東国

ヤマトタケルの原像の1つが大歳神であり、「常陸国風土記」ではその子・アジスキタカネヒコの事跡もまた重ねられていると指摘してきた。さらに、古い原像を考えるべきなのだろうか。徐福とその後継の東国での活躍は、大歳神の1世紀前にあたる。

第4回 1月9日(木)

### 「阿菩大神」をまつた人々は誰か？

『播磨国風土記』のみ、その名を残す「阿菩大神」は、出雲国から出御して播磨国に留まつたとされる。また「伊予国阿保のひと」が播磨にやって来たので、「あは」の地名があるとも書かれている。どちらも事実とすれば、この「伊予国」の集団の実体は？

第5回 2月13日(木)

### 「久米歌」と「久米」

『古事記』・『日本書紀』に「神武天皇御東征の折り、戦いの大勝利の凱歌」と記録されている「久米歌」が、実態は「サルタヒコ族」が紀元前7〜6世紀に大和へ進出した際の勝利の歌であることが指摘された。後世まで加茂族の後見者であり続けた久米族とは何者か？

第6回 3月12日(木)

### 徐福集団の「その前」と「その後」

紀元前3世紀の終わり頃に五百人とも三千人ともいわれる規模で、日本へやって来たといわれる徐福。集団が大きければ大きいほど、緻密な計画と、整備された受け入れ体制が準備されていたはずである。「播磨びと」がこれに係っていないはずはないが？